



地域に根差した 私学教育を目指して

学校法人石川義塾 学校法人石川高等学校・石川義塾中学校

理事長・校長 **森 涼**



1. 石川義塾の誕生

本校の前身である石川義塾が初代校長・森嘉種先生によってこの福島県石川町に創設されたのは明治25年6月のことであり、今年で創立129年を迎えたこととなります。

明治初期の日本では、藩閥政府による専制政治を批判し、憲法の制定や議会の開設、言論の自由を掲げた自由民権運動が全国各地で盛んに展開されておりました。明治8年、福島県石川村（現石川町）において、東日本初となる政治結社「石陽社」が、福島県三春町出身の河野廣中第11代衆議員議長らが中心となり創設されました。板垣退助が土佐に全国初の政治結社「立志社」を結成した、その翌年のことです。民主主義国家を実現するための大きなうねりが、東日本ではこの石川町から広がっていったのです。石陽社結成に尽力した活動家の一人、時の石川村長でもあった吉田光一氏は、古里の将来のために青少年の育成が不可欠と考え、この石川の地に上級学校を作ろうとしていた初代校長・森嘉種先生とともに、石川義塾を設立したのです。

森嘉種先生がこの僻遠の地に石川義塾を創設しようとした目的は、中等教育に恵まれないこの地方の子弟にその機会を与え、むなしく埋もれていく資質を掘り起こし、磨きをかけ、この地方の教育の向上、さらには文化の向上を促進するためでした。有為な人材を育成することによって国家や社会の発展に貢献するという純粋な教育精神があったからこそ、石川村長吉田光一氏をはじめとする地域の多くの方々から物心両面の支援を受けることができ、石川義塾を開設することができたのです。

東北地方では、明治5年設立の青森県・東奥義塾に次ぐ私学の誕生でした。この後明治40年には文部省の認可を受け、福島県内で6番目、私立ではもちろん最初の旧制中学校へと昇格しました。石川町は福島県の南部、阿武隈山地西麓の山々に囲まれた山峡の地に発達した町です。現在では人口が1万5000人程の過疎地ですが、本校創立当時は僅か4000人ほどの小さな村でした。これといった地場産業はありませんが、岐阜県苗木地方、滋賀

県田上地方と並び、日本三大ペグマタイト鉱物の産地として知られています。本校併設の鉱物館には、約 2500 点の鉱物が所狭しと保管されています。標本のほとんどが石川町の産出であり、初代校長先生と二代校長先生が自ら山野を歩き採取したもので、その多くを学会に紹介しました。石川地方が日本三大鉱物の産地として名声を得たのも、父子の功績によるところが大きいのです。

2. 建学の精神

グローバル化や IOT 社会の進展、AI の進化など、社会は私達の想像を超えるスピードで変化しています。10 年後、いや 5 年後を見通すことさえも難しい状況かと思えます。不易流行という言葉が示すように、教育は時代の流れに従って変化していくものでありますが、一方で私学には、どんなに社会が変化しようとも変わらない教育の理念が存在します。いわゆる『建学の精神』ですが、本校のそれは次に挙げられる 8 項目です。

- ① 人間として必要な学問への自覚と情熱、創造的研究心を高める。
- ② 自由で自主的な気魄に富んだ積極進取の精神を養う。
- ③ 子弟間の愛情が親密である。
- ④ 品性を陶冶する。
- ⑤ 誠実と勤勉を重んじる。
- ⑥ 礼儀と秩序を重んじる。
- ⑦ 質実剛健の気風を養う。
- ⑧ 行学一如の精神に従い実行力を養う。

初代校長先生は、「人間はいくら学問ができて、学問だけでは駄目である。人格が備わっていないといけない。」と常々後進に教授し、それを理念として掲げておりました。学問的にも倫理的にも優れた人材を育成し、学んだことを生活の中で実行する「行学一如」の精神を身に付けさせることが、129 年経った現在でも、本校教育の原点にあります。

3. 学力と人間力の向上を目指す

本校教育の中に脈々と受け継がれる建学の精神のもと、私が校長就任時に、独自の教育プランとなる『ドリエモプラン（夢ドリームと、感動エモーションを手にするためのプラン）』を立ち上げました。学力と人間力、つまり社会を生き抜く力の双方を向上させながら、

高校の3年間で自己実現をさせると共に、社会の様々な分野で将来的に活躍することができ、グローバル・リーダー（グローバルとローカルを合わせた造語）を育成することをビジョンとしています。

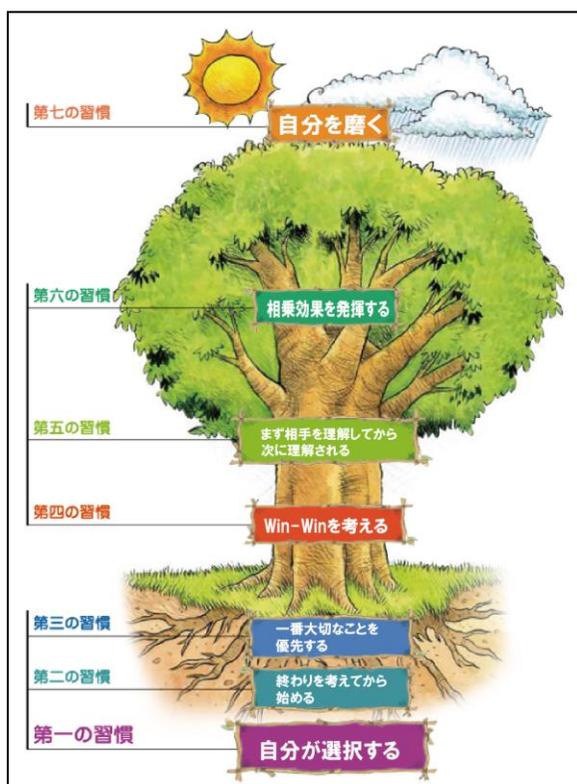
本校は、中学校（各学年2クラス）と高校（各学年7～8クラス）を合わせて、生徒数が約960名の男女共学校です。大部分の生徒はこの石川町を中心として、隣接市町村からスクールバスや路線バス、JR線を利用して通学しています。また、地域の統廃合となった小学校校舎を町から譲り受け、現在2つの男子寮と1つの女子寮として整備しています。学生寮には、約250名の寮生が全国から集い共同生活を送っていますが、全校生徒の約4分の1が寮生という状況です。

昭和の頃に一度廃校となった中学校は、平成20年に中高一貫校として、再び歩み始めました。他のコースとは全く異なるカリキュラムとなっており、高校からの外進生を受け入れず、内進生のみで6年間を過ごします。一人ひとりへのきめ細かい指導を心がけ、徹底した少人数教育を行うことを最大の特徴としています。

高校は、中高一貫コース及びイノベーション探究コースとハイブリッド文理コースについては、クラス替えのない3年間継続したコースとなります。その他のアドバンス文系コース、スタンダードコースについては、1年次に各自の興味、関心、適性などの自己理解を深めながら将来の目標を明確にさせたうえで、2年次から各自が希望するコースに応じたクラス編成を行います。1年次においてはいかに将来を考えさせ、夢や目標を持たせるかが鍵になります。定期的に行っている生徒アンケートからは、各学年とも将来の夢や目標がある生徒の割合が大変高いというデータが出ておりますので、これは取り組み続けたドリエモプランの成果であると自負しております。目的意識を持った高校の3年間あるいは中高の6年間を送らせることで、卒業にはその努力を進路実現という形で実を結ばせ、自己の力により成果をつかみ取ることの感動をすべての生徒達に味わわせることは、ドリエモプランの大きな目標のひとつです。

前述の通り、本校では学力と人間力の双方を向上させることを目標に取り組んでおります。学力を向上させるために、日々の授業を大切にすることはもちろんのこと、地域性の不利を克服するために様々な施策を講じています。例えばタブレット端末によるICT教育の強化や、毎週土曜日に行われる予備校講師の出前講座、英語4技能向上のためのオンラインスピーキング授業や鉄緑会によるオンライン授業などの様々な取り組みを通して、日々生徒達の学力向上をはかっています。

一方、生徒たちには学問のみならず、社会を構成する一員として、また自立した人間として生き抜くための力が必要です。この総合的な力、すなわち人間力を高めるため、平成21年度から道徳教育の一貫として『7つの習慣J』の授業を導入しました。これは全世界で3000万部以上のミリオンセラーとなった書籍を基にした教育用プログラムであり、成功者に共通する7つの習慣を体系化したものです。本校では、中学2年次と高校1年次に全員が履修しています。



▲ 7つの習慣の木

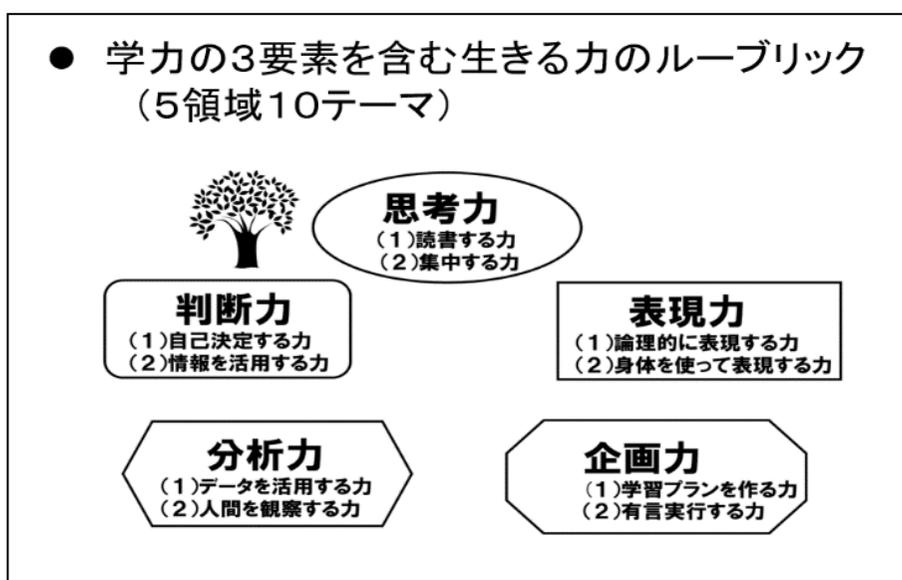
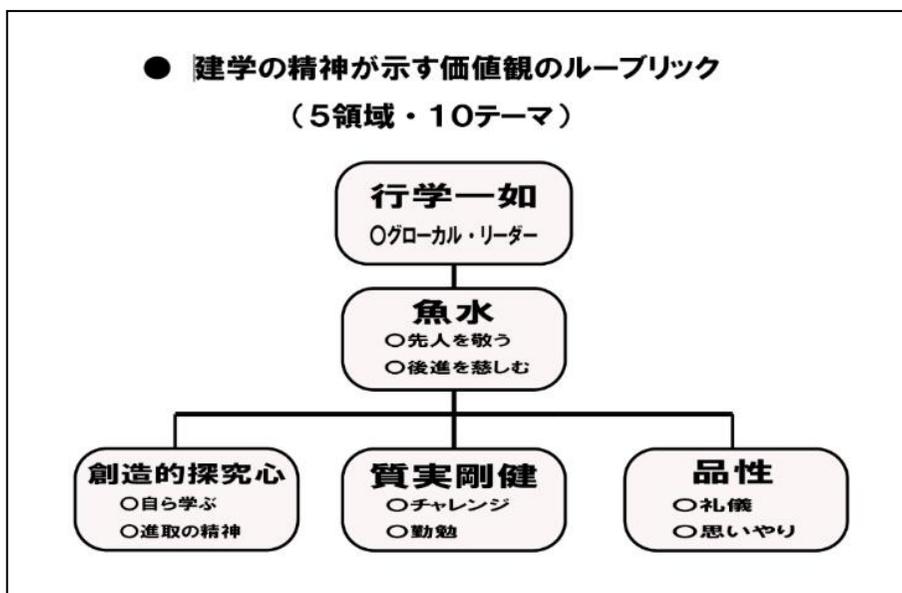
※7つの習慣©及び『7つの習慣J©』はフランクリン・コヴィー・ジャパン社の登録商標です。

7つの習慣Jは生徒のみならず、保護者の方々をはじめとする、地域の方々を対象とした親学講座を年5回実施しています。大人が受講しても同様に自己啓発される、大変ユニークな公開講座です。

4. 人間力を見える化する

一般的に、学力の伸長度は点数や偏差値で客観的に測ることができます。しかしながら、人間力の伸長度を測る物差しはありませんでした。本校においても、生徒達の人間力の成長度の確認は、私たちそれぞれの主観に頼らざるを得ない状況でした。そこで本校が紆余曲折を経てたどり着いたのは、『ループリック』という手段を用いて、生徒達の人間力の成長度を可視化する新たな取り組みでした。これは、生徒の学習面や生活行動面での様々な到達度を示す基準のことです。本校では、建学の精神が示す人間像に基づいた「価値観の

ループリック」と、学力の3要素をベースにした「生きる力のループリック」を柱に、生徒達が自らの成長度を客観的に自己評価します。生徒達はループリックで自分の立ち位置を確認しながら、更に上の自分を目指し取り組んでいきます。そして、自分の成長を「見える化」することが次なる挑戦へのステップとなり、人間力の更なる成長に繋がってゆくのです。



● ルーブリックの一例

〈領域〉 創造的探究心				
〈テーマ〉 自ら学ぶ心				
5	4	3	2	1
自ら夢に向かって、苦手なテーマでも能動的・継続的に取り組むことができる。	関心のあることであれば、主体的、継続的に取り組むことができる。	時折、与えられた課題以上の取り組みができるが、その状態を続けることができない。	与えられた課題はほぼやることができる。	課題に向き合おうとしないことが多い。

このルーブリックの実施により、生徒の内面的な成長度を客観的に把握することが可能となるというメリットに加えて、様々な効果が期待できます。例えば何をもって「挨拶ができる」とするかという基準は人によって異なりますが、『本校における「挨拶ができる」ことの基準は、ルーブリックの5の状態です』と言えば、我々教員の視点も統一され、共通認識を図ることができるのです。また、生徒アンケートの回答分布をチェックすることにより、学校行事や様々な教育活動の有効性を確認することも可能です。さらに、スローガンだけを語るのではなく、具体的に自校の教育方針を明確化することもできるのです。そして、何よりも私立学校のバックボーンでもある建学の精神の具現化に効果を発揮します。

以上のようにルーブリックを用いた『人間力の見える化』によって、教育活動における様々な効果が期待できると言えるでしょう。

5. コロナ禍の中で、本校が目指すべき教育の姿

本校においては高等学校生徒の約85%が大学・短大・専門学校へ進学し、約15%が公務員をはじめ一般企業へ就職をします。昨年度も京都大や国公立大学の医学部をはじめとして、多くの生徒が国公立大学への進学を実現しました。同時に、就職内定率も毎年100%を継続しています。一方、部活動も盛んに行われております。本校には運動部と文化部が

合計 37 部ありますが、今年度は男女合わせて 10 部が全国大会に出場しました。また、高校生の約 85% は、運動部をはじめ文化部や生徒会に所属し、日々勉強との両立を目指し頑張っています。学校として進学教育と部活動の強化を図るとともに、生徒一人ひとりが勉強と部活動との両立を目指していく『文武両道』が、本校の最も特徴的なスクールカラーのひとつです。これからもこの取り組みに、一層注力していきたいと思えます。

一方で、昨年はコロナ禍により各種大会の中止が相次ぎました。部活動に力を入れてきた本校生にとっては、突然目標を見失ってしまう程の衝撃的な出来事でした。「今までの努力は決して無駄ではない。今後の人生に必ず役立つから、新たな目標に向けて頑張してほしい」と励まし続けた日々を思い出します。

2020 年 2 月 28 日の内閣総理大臣の全国一斉休校要請から、コロナ禍での学校教育が始まりました。全国の多くの学校で生徒が登校できない状態が続く事態となり、学校現場の誰もが経験したことのない対応を迫られることとなったのです。本校でも余りにも突然のことで、休校に対する備えが全くありませんでした。再度の全国一斉休校を要請された場合に備えて、オンライン授業の準備を進めることを職員会議で告げました。その翌日から、全ての教員（非常勤も含む）を対象とした研修会が始まりました。ICT 推進委員会の若手教員を中心として進める研修会は 1 週間続き、ようやく全員がオンライン授業を実施できる状態となりました。突然の決定にもかかわらず、そして授業後の放課後の研修であったにもかかわらず、参加をしていただいた教員の皆さんと ICT 推進委員会のリーダーシップに今も感謝しています。準備も整い、『よし、これで何時休校要請されても大丈夫だ』と考えた矢先、2020 年 4 月 16 日に緊急事態宣言が全国に発令されたのでした。2 度目の全国一斉休校です。

事前に準備を進めていた事が功を奏し、休校に入るのと同時にオンライン授業を始めることができました。その際にはオンライン会議ツールである Zoom を使用し、双方向型の授業を時間割どおりに実施しました。本校では、中高一貫コースをはじめとする全員がタブレットを所持しているコースと、所持していないコースがあったため、家庭での協力を仰ぎ、端末の準備と Wi-Fi 環境の整備をお願いしました。どうしても端末がない場合は、生徒所有のスマートフォンで授業に参加させました。逐次アンケートを実施し、生徒の声を吸い上げながら、休み時間を増やすなど授業プログラムに改善を加えました。この様な早めの対応により、夏休みを短縮することもなく、通常どおりの期間の夏休みが可能となりました。

二度にわたる全国一斉休校時、約 250 名の寮生のうち、比較的自宅が近い県内の生徒については自宅に帰し、オンライン授業に参加させました。県外の感染拡大地域に自宅がある生徒達は敢えて寮に留ませ、自宅には帰さないこととしました。感染から極力遠ざけようとする配慮からです。およそ一か月にわたる緊急事態宣言が解除されると、すべての寮生がそれぞれの寮に戻り、学校はようやく日常を取り戻しました。オンライン授業が終了し、対面での授業の場が再開されたのは 5 月 18 日のことです。

本校ではコロナ禍による休校のみならず、台風等自然災害による休校の際もオンライン

授業を実施しています。今年度に入ってもコロナの感染拡大は続き、この原稿を書き上げる頃（8月末時点）には第5波の只中となっていました。毎月一度行う全校集会は未だ対面で実施できず、生徒達は各教室に設置されているプロジェクターを通して話を聞いています。

コロナの終息が見通せないニューノーマルな現状において、従来は対面で行うことが大前提であった学校活動ではありますが、時にはオンラインの利用といったハイブリッドな教育活動の実施が強く求められていると感じています。今後も、対面の良さとオンラインの良さを上手にブレンドしながら、学校教育を展開していきたいと考えています。

6. おわりに

現在とは異なり、1995年までは本校の入学試験日は、県立高校と同日に設定されていました。また、本校は高等学校の入学生の99%が専願受験生という、地方の私立高校としては類まれな学校です。地元には多くの卒業生がおり、中には三代、四代、あるいは五代にわたって本校の卒業生であるといったご縁のあるご家庭もあり、まさに地域に根差した学校と言えるでしょう。

社会の激しい変化に伴って教育界の変化も進み、少子化をはじめ私学を取り巻く環境もますます厳しさを増しています。創立から129年が経過した今、改めて、これからも時代と地域のニーズに応え、地域に寄り添いながら、信頼され続ける私学教育を目指していきたいと思えます。